

へき地・小規模・複式教育に関する検討(2)

複式教育研修講座での実施研究を通して

Some Thoughts on Rural Education and Small School (2)

権 藤 誠 剛

Seigou GONDOU

要 旨

小規模校・複式学級での実地研究で行われた授業をもとに、そこで実践された様々な試み、すなわち詩の授業における環境設定(仮想空間)と動作化・劇化の有効性と課題、算数「わたり」の授業における共通導入の意義と課題、教師のことばと子どものことばのずれの問題、体育館でのオリエンテーリングゲームを取り入れた算数ふり返り授業、複数支援・指導者体制の問題等に関して検討を加え、今後の見通しについて論じた。

[キーワード] 複式教育、動作化・劇化、わたり、共通導入、授業のゲーム化

はじめに

今年度も10名の複式教育研修の受講者(現職教師)を受け入れ、複式教育に関わる研修の一環として、以下に述べるような実地研修を行った。複式学級を抱えている学級・学校での1泊2日にわたる研修であり、1日目は当該校の先生方の複式授業を参観し、2日目は受講者がその学級・学校の子どもたちを相手にした複式授業(「持ち込み授業」と呼んでいる。)を行い、それを当該校の先生方を交えて、受講者全員で様々な角度から検討し、少人数、小規模校、複式学級での教育課題や教師の指導のあり方に関わる問題を明らかにし共有し、明日の教育実践を模索するのである。

受講者は3ないし4人ごとに低学年部、中学年部、高学年部に別れ、当該学級の先生と相談し子どもたちの様子も聞きながら、どのような持ち込み授業を行うかを計画する。当然、各学年部で実施する教科、形態、方法等は様々である。今回も、低学年部は1・2年合同で国語、劇遊びを取り入れた詩の学習、中学年部は3年と4年学年別のいわゆる「わたり」による算数で、独自の教材・教具を使つての授業、高学年部は5・6年合同で体育館での算数オリエンテーリングゲームの活動、といった具合にそれぞれ特徴と工夫と楽しさを凝らした実践が構想され実施された。

本稿では、それぞれの学年部での実践を概観し、その諸実践の過程や結果が問いかけた意味

*島根大学教育学部教育学研究室

や提起した課題、子どもたちにとっての意義や学び等について考察していく。

I . 劇遊びを取り入れた低学年 国語の詩の授業

第1・2学年 国語科 題材名「のはらであそぼう(詩を読もう 理解・音声表現)

通常、学級は1人の担任教師が授業を進める。したがって、複式教育の实地研究においても、計画段階においては学年部のチームで授業展開を共同討議し、授業案を検討し、教材・教具づくりを協力して行うが、実際の授業はあくまで1人で行う、といったやり方が考えられる。しかし、今回、低学年部(第1・2学年部)では、「せっかく3人でできるのなら、普段したくてもなかなかできないダイナミックな取り組みの中に子どもたちを巻き込んでやりたい。」との思いから、教室という空間に秋の風情を漂わせるいろいろな道具を作成して配置し、教室を日常ではない「秋の世界」に変え、その「あきのはら」と命名された舞台での劇遊びを取り入れた詩の学習が3人の教師によって計画され、1・2年生の子どもたちとともに進められた。

その際の、学習の意図や既習内容と題材とのかかわりや手だて、本時のねらいは、次のように考えられている。

学習の意図

低学年時の子どもは劇遊びが大好きである。遊びの中で役割を決めて楽しんでいる。また、読み物学習においてもお話の登場人物になりきって遊ぼうとする。遊びながら想像を膨らませ、豊かな表現活動を行う。学習全般において、低学年では、文章理解には声に出して読む活動が欠かせない。本時では音声を出しながら理解することを目指し、さらに体を使うことを通じて理解を深めるようにする。

本時では子どもたちの主体的な学習への取り組みとなるように、ということで野原に出かけて、秋を楽しむ劇遊びを取り入れながら、詩を学習する。

自分で学習のイメージを持ち、学習方法を選び、学習内容を決めるような場面を用意する。子どもたちの理解や表現を促し、多様な思いや願いに対応するためT・Tで取り組む。

各学年の既習内容と本題材とのかかわり

1年生の場合は、

平仮名を既習、2学期に入り、自分の思いを文字にして表現することの喜びを感じつつある音読も自分の力で進められるようになり、読む楽しさも感じつつある段階

2年生の場合は、

ある程度文章を読んだり書いたりする経験を重ねている

教材について

工藤直子『のはらのうた』の中から、「めだか・がっしょうだん」「どこいしょ」「よそいき」「ぼくと おひさま」が選ばれている。その選定理由や考慮観点としては、平仮名を多く使い、一つの作品の長さが低学年にふさわしく、親しみやすいこと言葉そのものや音が楽しいこと

低学年の子どもが大好きな生き物が出てくること

体を動かすなど具体的に真似ができそうな作品であること

季節感があること

活動にあたって

教室に道具を使って「秋の野原」を作り、次のようなコーナーが設置された。

- 変身コーナー 主人公の面などが置かれ、動作化や劇化に使えるようになっている。
- やまびこコーナー カセットレコーダーが準備され、自分の声を聞くことができる。
- 小川・森の切り株・丘 小道具があり、動作化などが行える。
- のはらステージ みんなの前で音読を行うことができるように設営されている。
- 練習のおへや ステージに上がる前に一人で音読練習ができる。

本時のねらい

	1年生	2年生
話すこと・聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・音読することを楽しむ。 ・友だちの表現のよさを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと声を合わせて音読することを楽しむ。 ・友だちの表現のよさを見つける。
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・書かれている様子を想像して動作化しながら、詩の楽しさに浸ることができる。(理解の能力) ・声の大きさ、速さ、音の高低に気をつけて、音読しようとすることができる。(言語についての技能) 	<ul style="list-style-type: none"> ・書かれている様子を想像して動作化したり、繰り返し音読しながら、詩の楽しさに浸ることができる。(理解の能力) ・声の大きさ、速さ、音の高低に気をつけて、音読することができる。(言語についての技能)

1・2年合同で進める形態を取るにしても、1年生と2年生とでは既習内容や学習経験の違いがあり、また各学年で独自の課題や教科での目標がある以上、当然それらを考慮し、それに基づいて共通するねらいと学年に固有なねらいとが設定されている。

本時の展開計画

<参考資料1>を参照。

実際の学習展開の概要

学習への意欲づけを行う導入場面では、3人の教師が虫の声をBGMで流しながら、揃いのステージ衣装で子どもたちの前に現れ、「メダカ合唱団」という詩を身振りや読み方の工夫(声の大小、速さ、高低や読む人数)を加えながら読む。ここでは、詩を読んでみようという気持ちへと誘うと同時に、読み方の工夫に着目させ、それを学習のめあてとしてつかむことができるように働きかける。

3つの詩を紹介し、その中から自分の好きな詩を選び、しっかり読んで楽しい詩にするように誘う。

3つの詩の内容をつかむために子どもたちとことばの意味を確認しながら教師とともに、教師と子どもたちと交互に1行ずつ一斉音読をし、次に「やまびこ」「れんしゅう」「へんしん」の各コーナーの説明を行い、最後に「のはらステージ」で発表会をすることを話す。

その後、子どもたちは気に入った詩の書いてある模造紙に名前を貼って、興味のあるコーナー

やへやに行って、また順不同にコーナーを回って気に入った詩の練習を行う。3人の教師の内、1人は子どもたち全体の様子を見渡しながら、他の2人は担当のコーナーに分かれて、子どもたちの相談に乗ったり誘いかけたり、いっしょに練習したり、助言や支援・指導を行う。

のはらステージでの発表会。発表したい気持ちを尋ねると、全員がステージでの発表に意欲を示す。男女それぞれ3人ずつのグループが発表する。発表を聞いていた子どもたちの感想を聞きながら、教師が寸評や注釈、評価言を入れる。最後に、3人の教師から子どもたちの取り組みや様子に関するコメントや感想、肯定的に評価する話、今後の見通しなどが示される。

1. 体を動かしながら、動作化や劇化によって理解を深める

動作化や劇化は、言語主義的、知識主義的な授業傾向を克服して、身体表現を用いて授業への子どもたちの意欲的参加を創り出し、学びや経験の主体化、活性化、深化を図ろうとする方法の一つである。動作化は身ぶりや表情や声による身体表現を介することによって、概念や情報、言語表現のレベルでわかったつもりでいる認識状態を動作再現しながらモニターし、認識内容を深く捉え直していこうとするものである。劇化は一定の場面設定と筋立てのもとに役割分担を行い、組織的に役割を演じていく過程において、認識や価値の主体的な再構成を図り、自由で創造的な表現、共同活動によってかかわり合う関係を体験させることを意図している。いずれも子どもによる個性的・創造的な表現と認識の深化の契機となる点において、有意義な方法である。

この授業においては、詩の世界を認識し、自分なりに表現する手段として動作化が位置づけられ、動作化を促す道具の工夫がなされていた。確かに、動作化や劇化は認識の深化を図る契機として有効な手だてであり、低学年の子どもたちにとっては馴染みやすい方法でもある。しかし、動作化や劇化はあくまで契機であり、「動作化・劇化 認識」といった直線的一方通行の関係ではなく、「動作化・劇化 認識」といった双方向の関係、しかもスパイラルに。さらに、たんに子どもに任せておけば、こうした関係が形成されるのかということ必ずしもそうとはかぎらない。これが持続的に形成されるためには、道具による促進だけでなく、この授業の中でも行われていた周りからの承認や励ましがいっそう必要であり、有効である。逆に、そうした周りとの関係がないところでの安易な動作化や劇化、また学級集団の関係性や解放の濃淡や有無によっては、認識の主体化、深化をもたらすどころか、逆に白けや嘲笑、茶番劇化を引き起こす危険性をもっているといえる。

2. 教室で読む詩と詩に「ふさわしい」場所で読む詩（仮想空間で読む詩）

国語で詩の授業を扱う場合に、普通ほとんどが教室の中で進められることが想定される。季節や生き物、自然に関する内容の詩であろうと。詩を教室で読むのをできればその詩にあった情景の中で読む詩とどのように違ってくるのであろうか。少なくとも、季節感のある詩の場合、外にでかけて、季節を感じながら季節の情景とふれながら、季節の空気を体で受けとめながら読む場合と教室とでは、子どもの取り組みにどのように作用するのであろうか。あえていえば、体で読む詩と頭で読む詩といった違いとして現れてくるのか。

この授業は戸外に出かけていくことはできないが、その「中間」にあって季節感のある情景

を演出し雰囲気を作りだし、そこで子どもと詩と出させて、先の疑問に迫ろうとしたのが、この授業の一つの提案だったと考えたい。もう少し広げていえば、他の単元や教科内容においても、できればその内容にふさわしい場所や環境で学ぶことの大切さを提起した授業だともいえる。たとえば、快適な学習環境のなかで環境に関する文章を学ぶのか、それとも汚染の実態に触れるなかでそうした文章を読むのか。

現実の環境ではないが、いわゆる仮想空間のなかで、つもりの空間をつくってそこで「遊び」ながら想像しながら、詩の世界に浸り、表現することの楽しさを味わい、そうした活動を通して詩の内容が理解できるように計画されたものであった。当初、読みに対する課題を持って、それを解決する方法として「コーナー」を利用する子どもたちの学びの姿が予想されていたが、実際には、必ずしもそういった姿は見受けられず、ねらいからはずれてしまったと見方もだされた。

しかし、こうしたコーナーによる活動の変化が、通常「同じ活動だと2回もすればすぐにあきてしまうぐらいの発達段階の12年生の子どもたちがこれだけ(一つの詩を少なくとも4~5回繰り返して読んでいた)の頑張りを見ることができたのは、それぞれのコーナーで、いろいろな活動があり、様々な活動を通して詩を読んだため、飽きることなく活動を楽しむことができた」ためだともいえる。

いずれにしても、「遊び」の空間が活動を支え、楽しいものにしたのは確かであるが、読みの深まりや課題への挑戦へは、とくに低学年においては、教師と一緒に活動する、励ます、声かけをする、友だちとかかわらせながら支えるなどの支援、働きかけがなければ、必要かつ十分だとはいえないのである。

Ⅱ. 「わたり」による中学年 算数科3年「三角形」 4年「面積」の授業 異単元異内容における共通導入による授業展開

算数科の異単元異内容での授業の場合、一般的には、学年を分けて、一方の学年は前時の続きの課題追求や定着・発展のための練習問題に取り組み、他方の学年は本時の課題について教師から直接指導を受けることから授業がスタートする。したがって、導入はそれぞれ異なっている。

しかし、本時の学習は3年「三角形」の導入、4年「面積」の導入の時間であり、いずれも図形の授業であり、異単元異内容であったが、あえて今回は共通の導入が試みられた。それは「同じ学級集団として学習に取り組むとき、別々に学習に取り組んでいくのではなく、みんなで一緒に学習していこうとする意欲を持たせるということ」また「3年生はこれから先の学習の見通しをもつことができ、4年生は今までの学習をふり返ることができる」と考えられたからである。

もちろん、導入は共通であっても、両学年の目標や導入以後の活動は独自の展開が構想されていた。

3年生の本時の学習目標

- ・ストローを使って、いろいろな三角形をつくらることができる。

- ・つくった三角形の辺の長さに着目して分類し、二等辺三角形、正三角形の定義について気づくことができる。

4年生の本時の学習目標は

- ・いろいろな方法を使って花壇の広さ比べをすることができる。
- ・周りの長さが同じでも広さが違うことから、面積の求め方について関心を持つことができる。

こうした両学年ごとの学習目標のもとに、3年生では、ストローやひごでいろいろな三角形を作り、辺の長さによって分類することにより、二等辺三角形と正三角形を知り、学習課題をつかむことが学習活動とされ、4年生は、花壇の広さくらべを通して面積の求め方に関心を持ち、本単元の学習課題をつかむ。また、単位を決めて広さを数量化するという測定のよさを知ることが学習活動とされた。

本時の展開計画

<参考資料2>を参照。

実際の学習活動の展開

共通導入の部分

模造紙1枚に書かれた「公園の花壇の挿絵(2種類の長方形、1種類の正方形、および直角三角形の4種類の図形)を示し、これを見て気づくことを子どもたちに尋ねると、子どもからは、「花壇の大きさが違うこと」「花壇の形が違うこと」が出された。教師は「形」ということばにこだわり、どんな形だというのかを問い返かえす。すると、「直角形」といった発言やそれに付け加えて「直角三角形」といった発言がなされた。

そこで、直角三角形の概念を全体で確認した後、それ以外の形にも目を向けさせ、どのようになっているかを問いかけると、「四角形」「正方形」という答えが子どもから返ってきた。これを受けて、「正方形」とはどのような四角形をいうのかを、図形を指しながら問いかけてつ角度や辺に注目させて、「同じ」という子どもの発言から同じ角度(直角)で同じ長さであることを全体で確かめた。

さらに、残りの形の名称を尋ねると「長方形」との発言が返ってきた。長方形になっている花壇の挿絵を示しながら、長方形の概念を問いかけて、向かい合う辺の長さ同士が同じ長さであることを確認した。

最後に、花壇の挿絵を示しながら、今日は3年生は「いろんな三角形のことについて」、4年生は「花壇の広さについて」勉強することを提示した。その後、いつもの授業のように学年ごとに前と後ろに分かれるように指示した。

学年ごとに分かれて、学習課題を提示する場面

3年生には、三角形を作るために準備した教具(4色、4本ずつのストローとモール)を各自持っていくように指示し、その後、4年生にわたり、模造紙と同じプリントを子どもに配布して、「どの花壇が一番広いかを比べてもらおう。見つけてもらおう。」と課題を提示した。

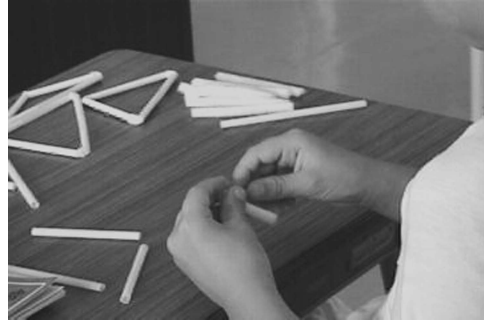
学年ごとに、学習活動を展開する場面

《3年生》

ストローとモールを用いて、いろいろな三角形を作成するという操作活動を中心に授業は展開された。ストローとモールを使って、三角形を作る活動は操作活動自体の楽しさと珍しさもあってか、子どもたちが意欲的に取り組んでいた。特に、算数に対して苦手意識を持っている子どもにとっては、計算や文章題を解くのと違った算数に興味を持ち、苦手意識を抱くことなく取り組みやすかった課題であることが伺えた。

《4年生》

面積という単元の導入で、子どもにとって初めての概念となるため、具体物を使っての作業を取り入れ、既知・既習の知識や経験での概念(長さ)では比べられないことに気づくようにするために、長方形と正方形のミニ実物を最初に配布するとともに、トレース用紙、方眼紙、物差し、はさみ等々を入れたヒントボックスを用意して、長方形と正方形のどちらが広いかを見つけることが課題として示された。



ある子どもは長方形と正方形の長さを測って、両方が同じ長さであることから広さ、面積も同じであると考えていた。別の子どもは、両方を重ね合わせて余った部分の長さを測ることで正方形の面積が広いと考えていた。しかし、面積と長さの概念を混同しているところもあり、それぞれまた別の方法で広さを比べることになった。

次に目をつけたのが長方形と正方形の花壇の中に描いてある花の数を数えてみることであった。しかしこれは、花の大きさや隙間の間隔が同じではないことに気づき、それぞれ違った方法を考えていった。



一方は、隙間の長さや花の長さをそれぞれ測り、隙間の中に花を埋めていくと全部で何個になるかを数えて比べるというものであった。他方は、隙間がない物はないかと考えて、ヒントボックスから方眼紙を持ってきて、正方形と長方形をその方眼紙に写し取り、切り取って、できた正方形の数を比べるというやり方であった。結果として、どちらの方法でも正方形が広いという結論になった。

1. 「わたり」(異単元異内容)授業における共通導入の試み

複式学級における算数の授業では、教科内容の順序性、系統性が比較的明確で強いため「わたり」が授業の基本形態として採られている。しかし、複式学級においても他の教科では、一部を除いてほとんど「同単元指導」で進められている。それには学級集団としてのまとまり、学習する雰囲気醸成や高揚、既習内容のふり返り・定着、下学年における未習内容への接触・見通し、授業展開の煩雑さの回避、教師の授業準備の負担の軽減などの理由があげられる。また、少人数であるがゆえに、学年の違いというより一人ひとりの子どもの違いに目を向けることの重要性和その可能性のゆえんでもある。本授業ではそうした合同形態のメリットや有効

性から判断して、算数科においても可能な限り、異学年を合同で進める形態での授業、導入場面での共通化の試みが構想されたのである。

導入場面を共通にすることのよさは、先にあげたようないくつかの理由が確認されるが、他方で学年をまったく無視するということはできない。両学年には、当然それぞれの学年に固有な教科の目標があり、それに沿った授業内容・方法・展開が求められる。異学年を合同で行う場合には、ややもすれば本時重点を置くことを計画している学年やその内容に傾斜しがちになる。したがって、異学年それぞれにおける導入の目的や位置づけ、意味をいっそう明確に意識し、自覚しておくことが要請される。

この授業の場合は、3年生には直角三角形の概念を確認すると同時に、三角形への関心を喚起し、見たことのある四角形が長方形や正方形という固有な名称で呼ばれ、直角三角形と同様に角度（直角）や辺に注目した概念として説明されていることが実感された。4年生には、直角三角形、長方形や正方形の概念をふり返ってその確認がなされたといえる。もちろん、導入の機能は、既習内容の再確認いっそうの定着を図るだけでなく、本時の学習課題に向けての動機づけ、意欲づけを図る点にもある。この点に関しては、4年生には、模造紙に示した2つの長方形と1つの正方形の内、周りの長さが同じ長方形と正方形で広さを比べた場合、どちらが広いといえるか、といったような、子どもにとっては長さが同じであれば広さも同じであろうと推測されることと、実際に重ね合わせてみると広さが同じとはいえない事実との間での子どもへの問いかけとなっていた。だからこそ、子どもはどちらが広いのかを知る方法をそれぞれ自分なりに考え、ねばり強く追求し続けることにつながり、最後に「周りの長さが同じであるのに、面積は違う」ということを一種の驚きを持って実感された子どもの様子がうかがえたのである。

2 教師のイメージすることばと子どものイメージすることば

ことばや概念は同じイメージをいだかせるものだという前提があるからこそ、ことばや概念によるコミュニケーションが成り立つのだと一般にいえる。しかし、いうまでもなくそれは、デコードとエンコード、つまり送り手の解読コードと受け手のそれとが同じ場合においてこそ成立する。また、かりに両方のコードが必ずしも一致していなくても成り立つのは、ことばや概念は単独で相手に届くのではなく、一定のまとまりや文脈の中に位置づけ、意味づけられているからこそ、意志や意図が伝わるのである。もし、コードがずれ、まとまりや文脈の中にもないとすると、コミュニケーションが成り立つかどうかは、はなはだ疑わしくなる。

あらためてことばのもつこうした特性、曖昧さとともにそれを介して子どもに語りかけ、問いかける教師のことばの重要性を示したのが、この授業であったといえる。

3年生の本授業では、カラフルなストローとモールを用いて三角形を作る活動が展開された。子どもたちからの感想ではそれらを使って活動する楽しさ、おもしろさが見られた。しかし、教師のねらいは、そうした活動を通して、長さの違うストローを使って三角形を作れば、子どもたちは自然に、辺の長さに着目して、形の同じ三角形と違う三角形から、三角形のなかま分けをするだろうと予想し、それを前提として4年生への「わたり」考えていた。ところが、その予想、前提が崩れたために、4年生への「わたり」の時間が限られた時間になってしまっ

た。

子どもたちは、三角形の大きさ、大小に興味を示し、三角形を重ね合わせて比べてはいるが、それが合同の場合の三角形は、「なかま」だという認識は持てても、相似形になると「なかま」だという認識にはいたらない。教師はそこで、辺に着目するように助言するが、子どもたちはその意味が理解されなかった。教師が三角形で考える「なかま」と子どもが抱く「なかま」とが違っていたのである。教師のねがいとしては、辺に着目してなかま分けをすると、二等辺三角形と正三角形を分けて導き出すことができるはずであったが、結果はそうではなかった。同じ大きさの三角形は「なかま」であっても、形は同じであっても大きさが違う場合には、子どもにとってはそれは必ずしも同じ「なかま」の三角形ではなかったのである。

「なかま」「なかま分け」ということばは、一般に使われる日常語であり、子どもたちにとって合同や相似といったことばよりはるかに馴染みのあることばである。だからこそ、「なかま」ということばは無意識のうちに、普段の子どもの解読コードによって解読され、文脈にいちづけることもなく理解されたため、教師の予想がはずれてのであろう。また、「なかま」ということばには、階層性があり、どの段階で使うかによっても違ってくる。たとえば、三角形群(二等辺三角形と正三角形)と四角形(長方形と正方形)が混在している場合に、なかま分けをすると、三角形群と四角形群に分けられる。その分けられた三角形群はなかまであり、それをまた「なかまわけしよう」といったとすると子どもはおそらく混乱をきたしてしまうであろう。どのレベルで、どういった視点でわけるのかによって、「なかま」のくくり方が違ってくるこの理解が求められるのである。そのためには、そうした知識や経験が必要とされるし、ここではそれを学ぶ、あるいは学び直す学びがあったといえる。

Ⅲ. 5年生、6年生合同による高学年 算数科ふりかえりの授業 オリエンテーリングゲームを取り入れたチャレンジ

この授業は算数に対して抵抗感を持っている子どもがいるため、そうした子どもに算数への意欲を高めてほしいと考え、ゲーム感覚を多く取り入れた学習内容のふり返りが設定された。ふり返りといって机に座っての単なる反復復習の学習ではなく、体育館を使ってダイナミックに活動してほしいとのねがいで行われた。

一人の教師が支援、指導する普通の学習とは違い、4名の教師(受講者)が関われる利点を生かし、子どもの動きをしっかりとつかみ合いながら、細やかに支援したいとの思いから発想されたものである。

本ゲームでは各学年ごとに問題20問程度を用意し、とくに一学期の計算の基本をふり返るために、問題は5年生が小数のかけ算とわり算、6年生が分数のかけ算とわり算を中心に用意された。

授業のねらい

算数ゲームの楽しさを味わい、今後の学習に意欲を持つことができる。

5年生・6年生それぞれが一学期に学習した内容をふり返り、問題を解くことができる。

さらに、算数のねらいだけでなく、次のような願い・子どもの姿が同時に期待されていた。

やる気を持って取り組む姿

協力して問題にチャレンジする姿

自分にとって難しい問題にもチャレンジする姿

つまずいたときにも、何らかの方法で解決の糸口を見いだそうとする姿

こうした研修だからこそ通常の授業とは違った演出や設定を試み、その中で子どもたちが今以上に学習に、算数により興味を持って学んでいってくれることにつながればとの期待を込めて、教師たちが意欲的に取り組んだものである。

本時の展開計画

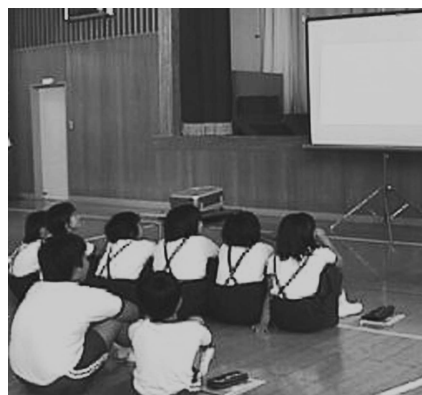
時間	学習活動	教師の支援
	1 .VTR を見る。	・「大切な物」がどうなったかが分かるような VTR を制作し、子どもたちに見せることで、問題を解こうとする動機づけをする。
	2 ルールを知る。	・活動しやすくするためにルールの掲示もしておく。 ・ルールについての質問も聞く。
	3 .ゲームをする。	・分からないことを聞きやすいように、エンジェルは体育館中央にいる。 ・採点マンは5年、6年の担当にそれぞれ分かれて採点する。また、必要に応じてヒントも与え、その場で解決できることは解かせるようにする。 ・今後も意欲的に学習に取り組めるように、助言したり、励ましたりする。
	4 .キーワード精読	
	5 .まとめ	・感想を授業後でもよいので書いてもらう。

実際の学習活動の展開

VTRを見て、子どもたちは大切にしていたドッチボール（大切な物）を「いじわるタイガー」が持ってってしまったことを知る。それを取り戻すためには、いじわるタイガーが出した問題に答え、探し出すためのキーワードを見つけなければならない。

子どもたちを助けるための「算数エンジェル」がステージから登場し、子どもたちが問題を解いたら埋められるようになっている20の空欄のある用紙を配布し、それにキーワードを入れ、学年ごとに合わせるとタイガーを倒し、ボールを取り戻すことができるとの説明を行う。その際、また以下のようなゲームの基本的なルールが示される。

- ・教科書、ノートなどは見てもよい。
- ・友だちと相談してもよい。



- ・算数エンジェルに聞いてもいいよ。
- ・わかる問題からやればいいよ。

問題のおいてある机に、学年ごとに分かれて問題を解き、解けると「採点マン」のところに歩いて正解するとキーワードを教えもらえるようになっている。

子どもたちは体育館のほぼ半分を使って、問題用紙の置いてある机と採点マンの間を行き来していた。机で問題を解くとき、静かに問題に取り組むのではなく声を出し合うことで自然と友だち同士で考え合ったり、エンジェルに尋ねたり、エンジェルの誘いで2~3人で解くような様子も見られた。



問題が解け、キーワードで用紙が埋まってくると文章(たとえば「器具室にありそうだな」となり、文章に示された場所にはいじわるタイガーを倒すための道具が準備されており、子どもたちはその場所が分かると走って探しに行った。頃合いを見計らってタイガーが現れ、子どもたちによって捕まり、ボールの隠し場所を白状するといった展開となっていた。

1. ゲームを学習活動に取り入れること

ゲームを授業に積極的に取り入れていこうとする試みは、1970年代に始まる。それはそれまでの授業ないし授業観を問い直し、新たな授業実践や授業観を提起しようとする授業改革の試みであった。伝統的な授業のイメージではきちんとして、静粛に真面目に授業を受けている子どもたちの姿が描かれる。それに対してゲームを取り入れた授業では、ゲームに熱中し楽しく体験しながら、時には騒然とした雰囲気の中で活動が展開される。もっとも授業で導入する以上、それを通しての知識の習得、人間関係の調節力、論理的思考力の形成などが問題とされる。そうした意味で「学習ゲーム」として提案され、教科等の目標や内容と関連した意識化が求められる。ルールに基づいて楽しく運営していくような様々な工夫の広がりもみられる。

この授業においても、こうしたゲームの要素が反映され、子どもの楽しむ様子がよく見受けられた。担当教師の構成の工夫、衣装、物語そして体育館という空間、それらが日常とは違う空間を演出し、その演出に子どもたちが少しも白けることなく、教師とともに楽しもう、楽しめると思えたことが、この授業の特徴の一つであったといえる。また、「ぼくはこういう算数をするのは、初めてで本当に意外でした。やっぱりキーワードというおもしろい発想は・・・本当にやって楽しくて、本当に初めての体験でした。なぞのかいじゅうやぬすまれた物、そしてキーワード。まるでダンジョンみたいなせっていで、ゲームかんかくでした。」といった声も聞かれた。この子どもの感覚からするとここで展開されたゲームは、たんなる一般的なゲームではなく、やや誇張すればいわゆる「テレビゲーム」的な世界であったといえるし、このことはこの子ども一人だけではなく、多くの子どもたちが感じていた世界であったのかもしれない。テレビゲームの善し悪しは、ここでは別にして。そうであれば、ゲーム一般の導入と全く同じ視座で論ずることのできない違った要素も含まれていたといえる。それは参加と体験と謎解き(問題解き)によってすぐに解決するのではなく、悪者と戦うための2つの重要なアイテ

ムを獲得し、それを使ってやっつけるというストーリー性が加味されていることにあるのである。

もちろん、区切りにイベントとしてゲーム化することの意味は学習の成果を振り返るような目的性のもとにあって有効であることはいまでもない。しかし「場所を体育館に移し、『ボールを取り返す』というゲーム性を取り入れただけで、『いやだなあ』という児童を感情を吹き飛ばしてしまった。これは偉大なるゲームの力といえる。しかし、今回は『ゲームが楽しい』のであって、『だから算数が楽しい』とは直結しない。」との指摘があるが、この授業だけではなくゲーム性を取り入れた活動に共通する課題である。ある意味ではゲームは楽しくなければならぬ。しかし、ゲームが楽しければ楽しいほど、他方で教科や領域そのものへの意識や動機づけが低下、ないし薄まってしまいかねないジレンマを抱えることになる。したがって、ゲーム性は付帯したり、くっつけたりすることから、教科等の特性に内在した要素をゲーム化することによって教科等の世界への誘いとなる、あるいはゲームに熱中することが教科等の力を付けていくことに連結するようなゲーム化の開発が必要とされる。また、ゲームを楽しむためには、一人ではなく、友だちと共同・協力しなければならない。あるいは共同・協力してはじめて成り立ち、楽しさが実感できる。そうしたゲーム化が今日求められているともいえる。

2 小規模校と複数支援・指導者体制づくり

高学年も4人の教師がそれぞれの役割を果たし、できるだけ子どもたちが生き生きとゲームに参加しながら、楽しみながら、算数の問題にチャレンジする姿を生み出すことができた。小規模校では、普段このような体制・環境をつくることは不可能に近い。しかし、大単元のくぎりであるとか、学期のまとめといった時期に、工夫する余地はあるように思われる。ひとつは、PTA活動、保護者との連携の一つとして2～3人の方に手伝ってもらうことなら可能性がないとはいえない。また、他学校との交流学习や合同学習に位置づけたり、学校ではなく社会教育施設へ出かけていき、そこでスクールヘルパーということで募集して、全校活動として行うということも考えられる。

さらに、高学年である程度の人数がいるような場合には、子どもにこうした学習活動のゲーム化を計画、実施させることを考えてもいいのではないか。学習であることの一定の枠組みは必要とされるが、その枠の中であれば子どもたちが自分たちで計画するように提案することもできるのではないか。全校で行うのであれば、当然高学年生が教師のアシスタントとして活躍することが必要とされるし、問題づくりから参加しゲームも考えることは、自分たちの復習となるし、遊びとも学習とも異なった場面での出会いは、かれらの成長にもプラスに働くことは間違いない。ただし、計画・実施への子どもの参加は、教師やヘルパー等の大人と違った配慮が求められることも当然である。すなわち、ゲームを通して個々の子どもの学習がどのように進められているかについて、教師が把握し、その場で支援・指導することができにくくなることは否めない。ゆえに進み具合や理解の様子を後からでも知るために、それらが分かるような問題用紙の作り方、記入用の大きめの用紙などの工夫が必要となる。

おわりに

上記であげてきた授業実践は、通常のそれとは異なり、自分の担任する学級ではない子どもたちを相手にする「持ち込み」「飛び込み」の授業であるために、当然子どもの様子や実態が必ずしも十分には把握されていない。そのために、事前の予想とは違ってしまい、ねらいとはずれてしまう可能性を常に含んでいる。しかも、きわめて短い研修のなかでの準備時間しか確保できない条件下にもある。こうしたことを前提として、しかし一度も会ったことのない子どもたちを想定して、できるかぎりのことを一生懸命やってみようという熱意をもって各グループで取り組み生み出された授業である。それぞれの授業がその学年や教科にふさわしい創意工夫と挑戦の精神のもとに取り組みされた実践である。

それらの創意工夫と挑戦の意味づけと分析を不十分ながら試み、小規模校・複式教育の領域に限定されない提起を行った。いずれの授業もインパクトのある実践であっただけに、それがその後、子どもたちにどのような変容をもたらしたのかは定かではない。それを何らかの形で検証する必要を感じるとともに、研修がどのような影響をもつものとなっているのかを含めて、研修における実地研究、「持ち込み」授業のあり方を検討する余地があると思われる。

< 参考資料 1 >

学習活動	教師の支援
<p>①めだか合唱団コンサート</p> <p style="text-align: center;">めだか合唱団コンサートをきく</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">楽しそう、自分もやってみたいな。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">声の大きさもいろいろあるんだな。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">声の速さや大きさを工夫している</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">声の高さでも読む工夫ができるんだな。</div> </div> <p>5分間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 詩を読むときの声の工夫（速さ、大きさ、間、高低）を子どもに具体的に知らせるためにまた、仲間と協力して読む活動の楽しさを伝え、本時の学習への意欲を高めるためにT1～3による範読をする。 ○ 範読終了後、読むときの工夫が気付いたことを発表し合い、読む練習に入ってからの子ども自身の指標とする。練習活動中でもいつでも振り返ることができるように黒板に簡条書き等でメモをして、残しておく。
<p>②秋ののはらで遊ぼう</p> <p style="text-align: center;">3つの詩を知る</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">どっこいしょ (きりかぶさくぞう)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">よそいき (おかさちこ)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">ぼくとおひさま (てんどうむしまる)</div> </div> <p style="text-align: center;">好きな詩を選び、秋ののはらで練習をする</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">変身コーナー</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">やまびこコーナー</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">小川・丘 森のきりかぶ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">のはら ステージ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">練習のおへや</div> </div> <p>25分間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 詩の内容をつかむために言葉の意味の分かりにくいところなど確認しながら模造紙に書いてある3つの詩をT1主導で一斉読をする。 ○ これからどのような活動をするのか、見通しを持つために次の説明をする。 <ul style="list-style-type: none"> > 30分後に発表会 > 秋ののはらの説明（コーナーごとの役割など） ○ 挑戦したい作品を各自で選び、グループに分けをする。意思をはっきりさせるために模造紙の中に名札を貼っていく。 ○ なかなか決められない子どもには、個別に相談のつりめだか合唱団も、選択制で入れるなどして自己決定できるように支援する。 ○ 各コーナーで自主学習の場に分かれて支援を行う。自分で次の活動が決められない子どもに留意して助言する。
<p>③発表会をしよう</p> <p style="text-align: center;">のはらステージで発表会</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">どっこいしょ (きりかぶさくぞう)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">よそいき (おかさちこ)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">ぼくとおひさま (てんどうむしまる)</div> </div> <p>10分間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○
<p>④友だちのよかったところを見つけよう</p> <p style="text-align: center;">気が付いたことを発表し合う</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">楽しかったね、おもしろかったな</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">上手に発表できたよ、またしたい。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">○○さんは～をしてすごかったね</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">○○さんと仲良くなったよ。</div> </div> <p>10分間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの活動を通して楽しかったことや、見つけたこと、自分や友達の良いところに気付くことができる評価書を心がける。（気づき：発言、カード） ○ 振り返りがしやすいように、本時の活動を通して子どものつぎみや、反応を紹介する。

< 参考資料 2 >

第3学年		形態		第4学年		
支援	学習活動			学習活動	支援	
<ul style="list-style-type: none"> ・花壇の形の中に、今までに学習した直角三角形を加えることで、直角三角形の定義について振り返ると共に、三角形について関心をもてるようにする。 ・いろいろな三角形が作られるように、4色、4本ずつのストローとモールを用意する。 ・辺の長さが視覚的にとらえやすいように、長さによって色の違うストローを用意する。 ・はじめに教師が、作り方を説明する。 ・お互いが見せ合い、自由に話し合えるように、机の形を向き合わせる。 ・分類しやすいように、児童が持ち寄った三角形の中で、全く同じ形の三角形が2つ以上あった場合は1つにするよう指示する。 ・色だけに着目している場合には、辺の長さに着目するように助言する。 ・それぞれの三角形に名前を考えることで、二等辺三角形や正三角形の定義に気づきやすくする。 ・どんな根拠で仲間わけしたのかを説明することを通して二等辺三角形と正三角形の定義を理解させる。 ・辺の長さを意識しながらもう1度2つの三角形をつくることで、二等辺三角形や正三角形の定義を理解させる。また、ストローの長さは、好きな長さにしてよいことも伝える。 ・つくった三角形は、両用紙に貼り付け、作品として残し、時間が合った場合は、4年生にも紹介する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1、公園の花壇の挿絵を見て、どんな形の花壇があるのかを発表し合う。 ・直角三角形の花壇がある。 2、ストローを使って、いろいろな三角形をつくる。 3、それぞれがつくった三角形をみんなで見せ合う。 4、辺の長さに着目してみんなでつくった三角形を仲間わけし、それぞれに名前を付けてみる。 5、仲間わけし、名前を付けた根拠を説明し、二等辺三角形や正三角形の定義を知る。 6、二等辺三角形、正三角形の定義を知り、もう1度二等辺三角形と正三角形をつくってみる。 	共通	共通	<ol style="list-style-type: none"> 1、花壇の公園の挿絵を見て、どんな形の花壇があるのかを発表し合う。 ・長方形の花壇がある。 ・正方形の花壇がある。 2、四角形の花壇の中で、どの花壇が1番広いのかをいろいろな方法を使って比べてみる。 ・実物大の長方形と正方形を重ね合わせて比べてみる。 ・長方形と正方形の周りの長さをはかって比べてみる。 ・トレース紙を使って写し取り比べてみる。 ・方眼紙に写し取り、マスの数を数えて比べてみる。 ・同じ大きさのおはじきを並べ、並んだ数で比べてみる。 3、どんな方法で比べ、どれが1番広い花壇だったのか発表する。 4、広さの表し方や求め方についての学習課題について把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・花壇の形は、今までに学習した直角三角形、正方形、長方形にし、3つの図形の定義について振り返られるようにする。 ・花壇の形は、周りの長さが同じでも広さが違うとは限らないことに気づかせるために、周りの長さが同じ長方形と正方形にする。 ・多様な比べ方を引き出すために、実物大の長方形と正方形を最初に一人一人に配る。 ・多様な比べ方ができるようにヒントボックスを用意する。ヒントボックスの中には、トレース紙、方眼紙、ものさし、はさみ等様々なものを入れておき、児童に自由に使ってよいことを知らせる。 ・多様な比べ方ができるように、ときどき、どんな方法で比べてみたのかを児童同士で情報交換し合い、友達との比べ方もやってみる。 ・長さや重さのように広さが数量化できれば便利だということに気づかせる。 ・時間があれば、本時に学習したことを3年生に伝える。 	
			個別	直接指導		
			個別	個別		
			直接指導			
			個別	個別		
			直接指導	直接指導		